たなかみ山
第8号
発行
桐生民具クラブ

治山治水　千年のつけ
地元民の血のにじむ労働（下の二）

山本文良

偉大な先駆者の現地踏査を含めた研究や指導・監督のもと、明治以降黙々として砂防工事に従事して下さった地元の方々のご苦労は想像を絶するものがあったのです。

炎天下の夏、寒風吹きすさぶ冬に関係なく、一日中禿山の急斜面にかじりつき固い土砂を掘り起こして溝をつくる床堀り作業。苗木や肥料となる藁。さらに山の斜面の保護流出を防ぐ芝草や割石・機材を担いだり背負って、道やら屋根やら分らぬ急傾斜の細い所を「肩当て」「息杖」をたよりに一歩また一歩注意しながら進む運搬作業。僅かな休憩時間でもすぐ高いびき。

大粒の汗・手足のマメ・肩や腰の痛み、すり傷など今の私たちには、とてもとても耐えられる仕事ではありません。

夕日が西の山に近づく頃になると一日の仕事は一応終わります。やれやれと一息ついたかと思うと、翌日すぐ荷物をかついで山へ登れるように準備にとりかかるのだそうです。疲れた足を引きずって家路につく時の喜び、帰ってからのお風呂どんなにどんなに待ちどおしく楽しかったことでしょう。

明治六年ごろから昭和三十年ごろまでの農閑期の唯一の現金収入だったのです。いや、不景気な第一次・第二次大戦後の就転先だったのです。昭和五年ごろは一日働いて四十銭から五十銭だったそうです。その頃米一升（一・五キロ）十五銭。女子は男子よりも勿論安く、全員には能率給もかせられていたのです。

以上は、直接砂防工事に従事して下さった新免町の沢山の方々からお聞かせいただいたものをまとめたものです。

また、桐生ご出身のYさんも子どもの頃を思い出して次のような話をして下さいました。小学校のころ親に〇〇〇を買ってと言うと、「砂防からお金をもらってきたら買ってやる。それまで待っていやいな」うんと返事をして、じっとその日まで我慢したと……大人も子どもも必死だったのです。

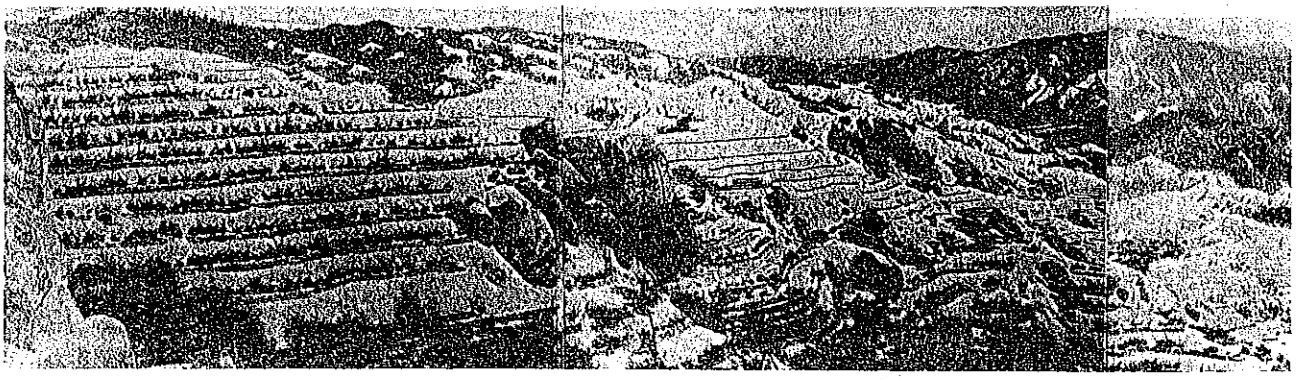
話は少し変わりますが、牧・中野・堂・桐生に「太鼓踊り」があったことは、田上郷土資料館発行の「田上の民俗」等でご存じの通りです。しかし残念ながら明治末期には、どうしたことか消えてしまいました。

お隣りの栗東町御園にもこの太鼓踊りがあり、今に伝えられています。伝承によると、この踊りはもとを正せば御園から桐生へ泊り込みで砂防工事に来ておられた方々が覚えて帰られたとか……。重労働に耐えられた昔の人の唯一の楽しみだったのかもわかりません。

現在では、砂防工事の植栽は殆ど終わり、山はどんどん緑を増しています。そのおかげで水害は次第に少なくなってきました。ここにあらためて、先駆者や地元の協力者さらに日々その任に当っていて下さる方々のご恩を忘れてはなりません。

しかし水との戦いの跡は、まだまだあります。

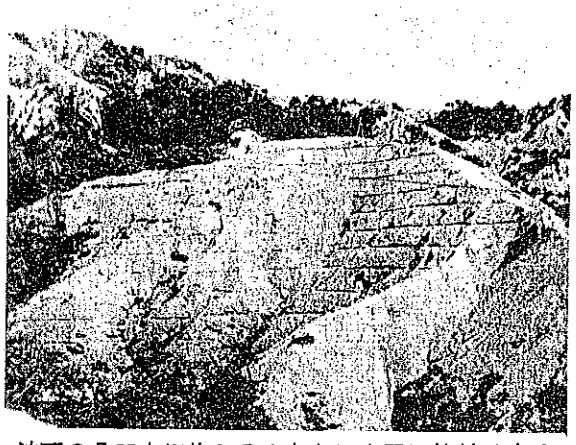
◆写真説明（下段）
左上は、金勝寺（栗東町）の森
中央は、国見の岩
右下は、大鳥居町と大戸川の峡谷
山腹の横筋は、砂防工事



昭和24年ごろの田上山（提供　山元豊一氏）

砂防山腹工事（建設省近畿地方建設局 琵琶湖工事事務所提供）

すじ付け

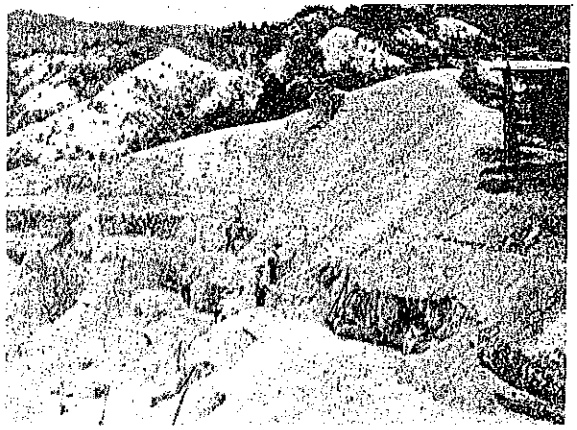


法面の凸凹を切均しそのあとに水平に筋付けする。
これは一般工事の丁張りに相当する。

芝積苗工

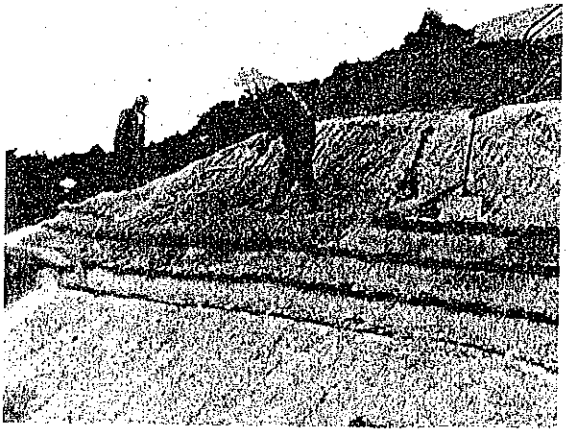
床掘及びわら伏込み完了後、山芝にて仕上げる。
本工法は、山腹工の代表的工法である。

階段工床掘中



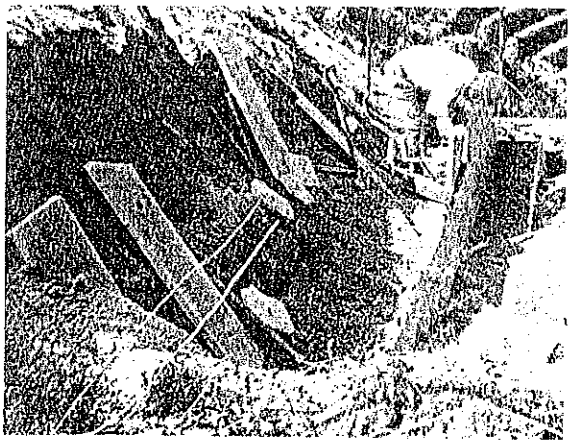
筋付けされた水平線を基準にして床掘し、完了後
有機質及水分保持等の目的のため、わらを伏込む。

わら積苗工



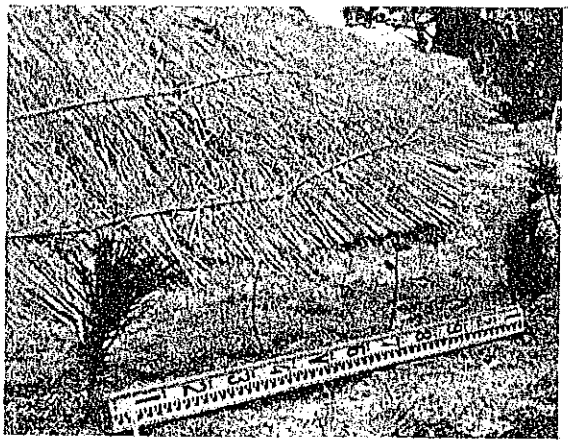
本工種は、山芝の不足しているところで芝積苗工
の代用工種として用いる。

ブロック板積工



山腹の基礎工事として、この工法を用いる。

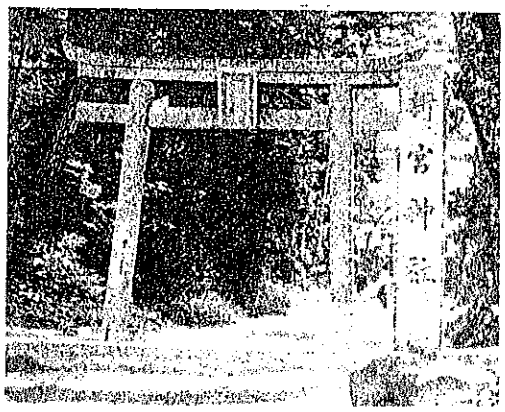
斜面被覆工及び植栽工



階段工天端に松及びヒメヤシヤブシを植栽する。
階段工間の裸地は、ワラ及び植生盤にて被覆する。

神仏習合時代の名残りを留める新宮神社（上）

新免町元宮総代　西村　喜八・山崎　勲



新宮神社の大鳥居（旧）

◎町名の起こり

私たちの住んでいる新免町は、初めから「新免」ではなく元は「米満」と言われていたのです。

これについては、とてもおもしろい記録（近江栗太郡志等）があります。今から約八五〇年前の保延三年西歴一、一三八年のことです。当時領主であった憲覚法眼が、この土地を坂本の日吉神社の十禅師社へ寄進したのです。

このことにより国役が免除されました。これを記念して、新しく税が免除になったということから「新免」と改名されたのだそうです。

昔から上田上学区は、有名な「田上米」の産地です。「米満」文字の意味からすると、米が満ち満ちているということになりおそらく良質の米が沢山穫れたものと推定されます。

最近、ふとしたことから「田上の酒米」といえば牧町。牧町と言えば「酒米」と他町村の方々でもよくご存知です。しかし、もう一段おいしい米が穫れる所が二か所あるとO農機具店のK氏が教えて下さいました。本当は秘密にしたいのですが、あえて紹介します。

それは、牧町の大戸川に架かる綾井橋を渡っての山裾の田地。もう一か所は、新免町を流れる田上羽栗町の湯出より上の田圃とのことです。地元の人より他所の人の方が敏感なのかも知れません。

成程考えてみますと、昔から米の穫れ高や味のよさは田圃の価値を左右するバロメーターです。将軍の「天領」指定や大名（殿様）の評価を米の石高で決定されたことでも伺がわれます。

収穫が少なく味の悪い米の土地を神社に寄進するはずはありません。だから、新免は昔からすばらしい所であったのです。

◎人々の願いと神まつり

中野・堂・羽栗の各町から新免町へ入ってくると、東の山裾に三階建てのフィンランド学校と並んで白い大鳥居が緑の山を背にしてくっきりと見えてきます。ここが新免町の氏神さん鎮守の「新宮神社」です。

ご祭神は、速玉男命。近江栗太郡志には一柱となっていますが、地元では十禅師権現・新宮大明神の三柱です。他に境内社の皇大神宮・稲荷大明神・お薬師さん（薬師権現）野上神社が祀られています。

第一のご祭神速玉男命については、図書で調べてもあちらこちらでお尋ねしてもわかりませんでした。でも、栗東町荒張の大宮信生氏にとても詳しく教えていただきました。しかし、紙面の都合で残念ですが要点のみとします。

この神様は「早水の神」激流の神水の神だったのです。特に、普段は「水無し川」であっても一度雨が降ると忽ち出水・激流となる川の周辺におまつりすると人々を水害から守って下さるという霊験あらたかな神様です。

そう教えていただくと、新免町は後ろは田上の大はげ山。北は吉祥寺川。東は真光寺谷。南は宮川があります。若し田上山に大雨が降ると、見ている間に周りの三つの川は出水氾濫と一たまりもありません。

次に十禅師権現は十人の禅宗高僧の化身。新宮大明神は新免町の産土神即ちご先祖。お薬師さんは薬師如来の化身。稲荷大明神は五穀豊穣の神即ち農業神。野上神社は、山の神に対する野の神・田圃の神です。

まず速玉男命に水害から土地財産や身を守ってもらい、新宮大明神のご先祖に感謝し、十禅師権現の学・徳・行を手本とし、さらに皇大神宮日本の親神様を拝し、稲荷大明神・野上神社に五穀豊穣を祈願する。不幸にして病魔に犯された時には、薬師如来に治癒を祈念する。尚、天命を全うした時は、大鳥居の側に約八十年前から移祀されている地蔵菩薩に来世安楽を祈願するという理想的な仕組みになっています。

この新宮神社に参拝すると、江戸時代の終わりまで続いた神仏習合の名残りが一目でわかります。

明治元年の神仏分離令や廃仏毀釈の波が、この片田舎までは及ばなかったのでしょう。

現代にとっては、日本の神まつりの歴史の一端を伺う貴重な存在なのです。

先人の知恵

柿渋の利用

ふれあい資料館　山本三郎

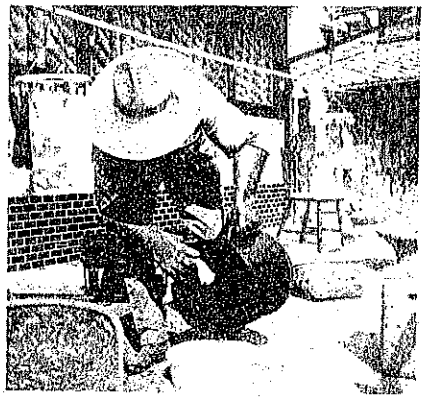
柿を大きく分けると、甘柿と渋柿になります。甘柿はそのまま食べられますが、渋柿はそうはいきません。

今の世の中は、田圃がどんどん整備されて非常に能率的になっています。

そのため土手や畦にあった野小屋や柿の木は、殆ど見られなくなってしまいました。でも、あの昔語りの建物や木は、お百姓さんにとっては最高の休憩場所だったのです。

柿の木も渋柿だったら、一寸人手にかかりません。

渋柿の利用は様々あります。加工して干し柿・さわし柿・熟し柿と甘くしたり、柿酢をつくったりして食用にします。



柿渋塗り作業

しかしそれだけではありません。渋柿の渋を利用して、生活の諸道具をより長く大切に使ってきたのです。

九月ごろだったと思います。用たしで町内をまわっていると、友人の山本宇一郎氏が柿渋を採取して桶・箕・枡などを持ち出して塗っておられる風景に出会いました。

私は感動で胸が一杯になり、幸い持ちあわせていたカメラのシャッターを切りました。

柿渋は体や衣服等に着いたら中々とれないこと。少し匂もあるが虫がつかないという特性を生かして、いろいろな道具を大切にしておられるお姿……。

「この桶は、先々代からの物です。ご先祖さんが、柿渋を取り何回も何回も塗って大事に大事に使ってこられたおかげで、私も使わさせてもらっています。」と言いながら、又手を動かされました。

今はポイ捨ての世の中。本当に本当に頭が下がりました。

今日は、まず柿渋の作り方をご紹介します。

九月中旬ごろ渋柿を取り集め、二～三日の間に石臼または米搗臼に入れて杵で割砕します。

こなごなに潰された柿の実を布袋に入れて絞り出すと渋液汁が出来上ります。直接体や衣服にこの渋汁が着くと茶褐色に染まり中々とれませんから、必ずゴム手袋をはきます。

次に、塗り方です。原液のままでは濃すぎますので、少し水を加えて薄めて布に浸して塗りつけます。

最後に乾燥ですが、粘りがありますので土や砂がついたり転んだりしないように気をつけます。

さらに柿渋を塗ったものをあげると、木製品では枡・杵・桶・机・椅子・足踏台など。紙製品では敷物・酒袋・穀物袋・雨合羽など。竹製品では箕・篭など。竹と紙製品では渋うちわ・張子・漏斗などです。

少しつけたしますが、敷物は、和紙を中心に丈夫な紙を何枚も重ねて貼ったものの表裏に渋液汁を塗ったものです。張子も渋うちわとよく似た製法で、初め長方形の篭を竹で作りその上に和紙等を貼ります。次に渋液汁を塗ったものです。漏斗は、主に俵に米や麦を入れる時に使う大型のものです。張子と同じように竹で漏斗を編んで紙を貼り液を塗ったものです。

渋液汁を塗ると、水を通さない。丈夫。滑りがよくなる等の長所もあり昔から珍重がられていましたが、昭和三十年ごろから殆どしなくなってしまいました。

しかし、草木染では逆に見なおされつつあるとのことです。

上田上の道しるべ(1)

山本文良

平野町にある瀬田農協上田上支店西側の土手に、四角形の火袋をもつ石の角柱が建っている。二八、五×二九、五×一四四、五）よく見ると笠は下に落ちている。

○不動一里二十二丁　立木二里六丁
　勢田三十一丁
○桐生三十丁　目川一里廿丁
○明治十年八月　草津二里
○大神宮　発願　西浦弥右門
　西浦万左ヱ門

と四面にわたって陰刻されている。この道標は、道案内だけだろうか？

お礼と訂正

ご投稿・取材ご協力・資料ご提供本当にありがとうございました。心からお礼申し上げます。

尚、前号は8号と書きましたが、7号の誤りです。お詫びして訂正します。

桐生民具クラブ代表　山本文良
電話㊾〇〇七七有線五六七八